

## 当科における顎顔面口腔外傷患者の臨床統計的観察

高松赤十字病院 歯科口腔外科

米本 嘉憲, 徳善 英紀, 植松 彩

### 要 旨

2011年1月より2015年12月までの5年間に当科を受診した顎顔面口腔外傷患者276例を対象とし、臨床統計的観察を行った。

年別患者数は、2011年は44例であったが、その後は年約60例であり、男女比は3:2であった。年齢分布は10歳未満が最も多かった。来院経路は院内紹介、直接来院、院外医療機関からの紹介による受診の順となっており、受傷原因は転倒・転落が最も多かった。受傷部位の内訳は、軟組織外傷が最も多く、次いで歯の外傷、骨外傷の順であった。骨外傷においては、観血的整復固定術が45.1%に施行されていた。

今後も顎顔面口腔外傷の診療において、当科が総合病院の診療科として果たす役割りは大きいと考えている。

### キーワード

顎顔面口腔, 外傷, 臨床統計的観察

### はじめに

顎顔面口腔外傷は、出血、感染の制御に加え、審美性、咬合・咀嚼機能の回復などを考慮した治療を要するため、高い専門性が求められる。今回、当科における顎顔面口腔外傷患者の実態を把握し、今後の対応の一助とするべく、臨床統計的観察を行い若干の知見を得たので報告する。

### 対象・方法

2011年1月より2015年12月までの5年間に当科を受診した顎顔面口腔外傷患者276例を対象とした。検索項目は、年別患者数、性別、年齢分布、来院経路、受傷原因、受傷部位、受傷部位別治療内容とし、外来、入院カルテの記載事項から調査を行った。

### 結 果

#### 1. 年別患者数 (図1)

2011年は44例であったが、その後は年60例ほどとなっていた。

#### 2. 性別患者数 (図1)

男性166件、女性110件、男女比は3:2であった。

#### 3. 年齢分布 (図2)

10歳未満が最も多く、次いで10歳代であった。

#### 4. 来院経路別患者数 (図3)

院内紹介による受診が最も多く118例(42.8%)、次いで直接来院106例(38.4%)であった。院外医療機関からの紹介患者は52例(18.8%)であった。

#### 5. 受傷原因の内訳 (図4)

転倒・転落が最も多く154例(55.8%)、次いで交通事故69例(25.0%)、スポーツ23例(8.3%)の順であった。

#### 6. 受傷部位の内訳 (図5)

軟組織外傷が最も多く126例(45.7%)、次いで歯の外傷79例(28.6%)、骨外傷71例(25.7%)の順であった。

#### 7. 受傷部位別治療内容 (表1)

1) 軟組織外傷においては縫合処置を要した症例は37例(29.4%)であった。

2) 歯の外傷における治療法は、経過観察が40

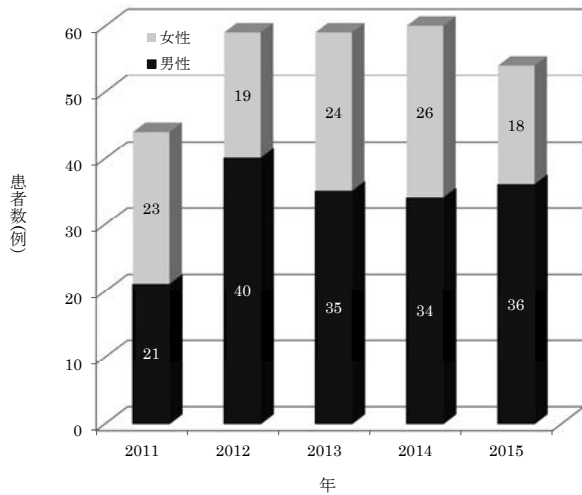


図1 年別および性別患者数

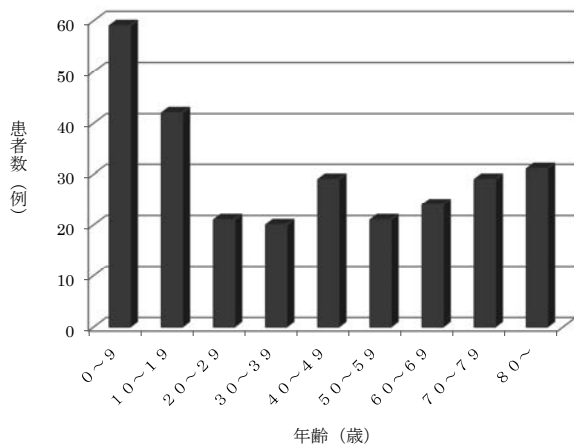


図2 年齢分布

例(50.6%), 整復固定術が36例(45.6%), 拔牙術が3例(3.8%)であった。

3) 骨外傷における治療法は、観血的整復固定術32例(45.1%), 非観血整復固定術22例(31.0%), 経過観察17例(23.9%)であった。

### 考 察

当院は26診療科を有する総合病院であり、地域医療支援病院、第二次救急指定病院として救急医療に積極的に取り組んでいる。今回、当科が関わる救急患者の大半を占める顎顔面口腔外傷患者について、2011年1月より2015年12月までの5年間に当科を受診した276例を対象とし、臨床統計的観察を行った。

年別患者数をみると、2011年は44件であったがその後は年約60件で推移しており、今後も同程度の患者数が見込まれる。

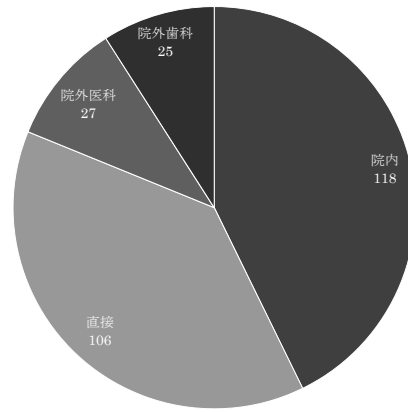


図3 来院経路

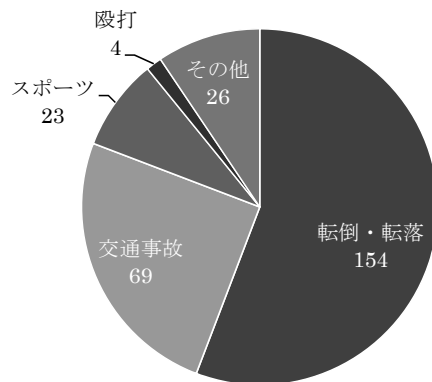


図4 受傷原因

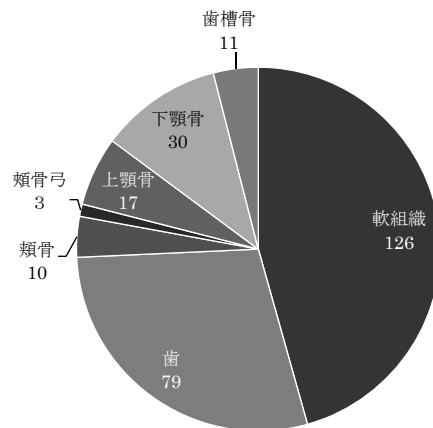


図5 受傷部位

患者性別は、男女比3:2で男性が多かった。年齢分布は、10歳未満が最も多く(21.3%)、次に10歳代(15.2%)が多かった。これらは他施設の報告<sup>1~6)</sup>と同様であった。小児患者が多い要因としては、活動性が高いにもかかわらず歩行が不安定であること、転倒時に上肢で顎顔面口腔領域を保護することが困難であることが挙げられ

表1 受傷部位別治療内容

| 受傷部位  | 治療内容      | 症例数         |
|-------|-----------|-------------|
| 軟組織外傷 | 経過観察      | 89          |
|       | 縫合処置      | 37(全身麻酔下:5) |
|       | 計         | 126         |
| 歯の外傷  | 経過観察      | 40          |
|       | 整復固定術     | 36          |
|       | 抜歯術       | 3           |
|       | 計         | 79          |
| 骨外傷   | 経過観察      | 17          |
|       | 非観血的整復固定術 | 22          |
|       | 観血的整復固定術  | 32          |
|       | 計         | 71          |

る<sup>7-9)</sup>。しかし、近年は高齢者が転倒により顎顔面口腔領域を受傷するケースも増加している。

受傷原因については、これも他施設の報告<sup>2-6)</sup>と同様に転倒・転落による受傷が最も多かった(55.8%)。これは前述のように、小児、高齢患者が本疾患の患者の主体になっていることが要因と考える。

来院経路については、院内他科からの紹介が最も多く(42.8%)、次いで直接来院(38.4%)の順であった。院外医療機関からの紹介率は18.8%であり、これは当科の初診患者全体の紹介率77.3%(2014年度)と比較すると低いものであった。緊急を要する疾患の性格が、他の医療機関を経ずに当院を直接受診している要因と考えられた。他施設では歯科口腔外科を直接受診する機会が多いようである<sup>1,3,4)</sup>が、当院では日中も救急患者については、救急部担当医師の診察の後に各診療科へ紹介する体制になっているため、院内紹介患者の割合が高くなっているものと考えられた。

受傷部位の内訳では、軟組織外傷が45.7%と最も多く、次いで骨外傷が25.7%であった。これは他施設<sup>1-3,5)</sup>とほぼ同様であった。

受傷部位別治療内容をみると、軟組織外傷例においては29.4%に縫合処置が必要であった。またこのうち5例(13.5%)に対しては全身麻酔下での縫合処置が行われており、そのすべてが小児患者であった。小児においては無理な局麻下での処置は、精神的苦痛、偶発事故の危険性がある。審美性も考慮した精密な縫合の必要性、既往症なども考慮し、今後も全身麻酔下での縫合処置の選択肢を検討すべきであると考ええる。

歯の外傷の治療法については、経過観察

50.6%、脱臼歯の整復・固定45.6%、抜歯3.8%となっていた。当科では多くの症例で、処置の後はかかりつけ歯科への紹介としている。

骨外傷の治療法については観血的整復固定術45.1%、非観血的整復術31.0%、経過観察23.9%となっていた。手術症例の割合は他施設の報告<sup>1-3)</sup>よりやや高いものとなっていた。これは当院が第二次救急指定病院であること、麻酔科、手術室スタッフなどのスムーズな手術への対応・協力によるものと考ええる。今後も顎間固定期間・入院期間の短縮、骨片固定の確実性などの手術の利点、また患者の年齢、既往症などを考慮し、手術治療の選択肢を慎重に検討していきたいと考える。

顎顔面口腔は耳鼻科、脳外科、皮膚科などと診療領域が重なる部位である。また患者の高齢化により全身管理に注意を要する症例の増加を認め、内科、麻酔科などとの連携の重要性も高まっている。今後も顎顔面口腔外傷の診療において、当科が総合病院の診療科として果たす役割りは大きいと考えている。

## おわりに

今回われわれは2011年1月より2015年12月までの5年間に当科を受診した顎顔面口腔外傷患者276例に対して臨床統計的観察を行い、若干の文献的考察を加えて報告した。

## ●文献

- 1) 高田雅之, 三好憲裕, 西嶋克巳, 他: 口腔顎顔面外傷98例に関する臨床統計的検討. 日本口腔外科学会雑誌 41: 53-55, 1995.
- 2) 中川嗣文, 石崎力久: 当科における顔面外傷症例の検討. 市立室蘭総合病院医誌 33: 40-44, 2008.
- 3) 井手正俊, 勝山直彦, 奥山宜明, 他: 当科における顎顔面外傷の臨床統計的検討(抄). 日本口腔外科学会雑誌 57: 449, 2008.
- 4) 村岡重忠, 李進彰, 小林正樹, 他: 神鋼加古川病院における過去3年間の顎顔面外傷の臨床統計的観察(抄). 日本口腔外科学会雑誌 54: 148, 2005.
- 5) 岡本愛彦, 本田武司: 当科における顎顔面領域外傷患者の臨床的検討(抄). スポーツ歯学 12: 96, 2009.
- 6) 山田聡, 森敏雄, 渡邊裕加, 他: 滋賀医科大

- 学医学部附属病院歯科口腔外科における顎顔面外傷患者の臨床統計学的検討（抄）. 滋賀県歯科医学会雑誌 4 : 50, 2016.
- 7) 米本嘉憲, 中山康弘, 岩田雅裕 : 高松赤十字病院歯科口腔外科における小児顎顔面口腔外傷の臨床統計的観察. 小児口腔外科 14 (1) : 12-15, 2004.
- 8) 伊藤良平, 榎 宏剛, 久保田耕世, 他 : 当科における小児口腔顎顔面外傷症例の臨床統計的検討. 小児口腔外科 24 : 161-169, 2014.
- 9) 喜多憲一郎, 西村一行, 岡野 健, 他 : 当科における過去7年間の小児顎顔面口腔外傷の臨床統計的観察. 小児口腔外科 25 : 1-7, 2015.